

化身土卷には

信罪福の心を以て名号を称念するが故に教は頓にして根は漸機なり、行は專にして心は聞す。

とまた同卷に

凡そ大小聖人一切の善人 本願の嘉号を以て己が善根とするが故に 信を生ずる事能はず仏智を了らず、彼の因を建立せる事を了知する事能はざるが故に報土に入る事なきなり

と仰せられてあるが、之は二十願の機が 他力の中の自力に停つて 他力不思議の十八願に帰入する事能わなない偽善者を誡められた文である。今少し言葉を柔げてえは、罪悪は怖しい、福德は勝れているからなるべく善い心を起して功德中の王である南無阿弥陀仏を称えて往生しようと思志しているのであつて、称名を怠りなく称えながらも善心が起れば往生は一定と思ひ、悪心が起れば不定の思いをするのであるから、之を若存若亡の行者と言わなければならぬ。助けて下さる名号は頓極頓速の不思議力が有るけれども 受ける機が本願の勅命を領受してはいないではないか。名号の太行の独ばたらきとでは言っているけれども雑修の思いが去らないではないか。

次の文句は 口でこそ五逆の人間とか悪性のやまない者とか言っているけれども、其の实本願を素直に聞かして戴いて喜ばして貰っている、言わば自惚、買被りの行者であるから一切の善人と仰せられたのではないか、これだけ喜ばれるから往生出来るであろうと喜び心に腰を据えているから 小さい自力浅心の安心は出来るだろうけれども、仏智不思議の深信は出来ないのだ。 下々品の悪性は自分一人であつたかと驚かされていらないから 五兆の願行の生血を飲んでいない、平生の時飲んで

いないから報土往生は出来ないのである。

真宗の同行が口でこそ他力の信仰と言っているけれども、心は何時も自力に流れている。お助けの法ばかりに眼を注いで墮ちる機を見向きもしない、親が知っていると投げやりにしているのを他力の様に心得ているが、此の機が満足しなくて法を聞いた所詮が有るものか、機を見れば手間が掛ると言っているが、手間の掛る機を今解決付けて置かなくて明日の往生に間に合うものか。死にさえすれば往生と言っているが、死後に仏力に依って五十二段が超証出来るのなら現生にて不退になければなるまい、現生不退とは今此の世で心が命終し即得往生するのであって、どうも成れないと泣いた機が成れてくれなければ平生業成ではないぞ。

魂のささやく声を聞けば導かれる同行よりも導く僧侶が悪いのだ、自信の抜けた教人信をやっているから信仰に活気がないのだ、真剣に切込んで求道しないから疑雲が知れないのだ、知れないから晴らす為に真剣にならないのだ、真剣にならないから薄紙一重が鋼鉄の門よりも猶堅いと言う事が判らないのだ、判らないから今解決して戴かなければ死んだ先の事など考えられないと踏込めないのだ、踏込まないから極悪最下の根機は私一人であるとし出されないので、し出されないから三定死の機になれないのだ、成れないから自力無効と手が離れないのだ、離れないから他力不思議が領受出来ないのだ、領受出来ないから信一念の水際が判らないのだ。判らないから信前信後の境目も知らず、凡夫には明らかな事は無いのだとか、一念の早業が判るものかとか、凡夫が戴いたら自力とか、機を見れば手間が掛るから法の大丈夫を仰ぐばかりとか、言って、ぼんやりしているのを他力の様に思っているが、本当に真剣に求道した事があるか。他人の財産を眺めて喜んでいたので自分の中にはならないぞ。聖人様が仰有ったから間違いはないと言っているけれども、聖人は血の垂るな求道をなさった後、苦が抜けたから仰有ったのであって、自分は話を食べて慶んでいるのでは臨終の関所が許さないぞ。「太閤記誰が読んでも天下取り」読んでおれば調子よくすらすら天下が取れるけれども、読んでいる人には生死の間を往来する苦心

が無いのだから天下を取った喜びはない。聖人様は一も二も無く私の為に御苦労下さったから 私は唯で往生さして戴くと
言っているけれども 親の信心が子供に譲れないのだから 聖人様の御苦労が私の御苦労になるものか、聖人様の真似では
真似であつて 真実ではない、聖人様の辿られた御心を辿つて求道しなければ広大難思の慶心は得られない。 そんな大きな
慶びが凡夫に獲られるものかと大抵言っているが、 聖人様は獲られない事を獲たと嘘を仰せられたのか、私に出来ない事を
聖人様が仰せらるるがない、 煩悶が強ければ強い程撰取された慶びは大きいのだ。 自分の柄を知らないで法を値踏みしてい
るから不思議が味わえないのだ。 鏡に向いたら姿が見えるだろう、 法に向いたら機が見えるだろう、 見せる為の法である
のに 見ては手間が掛ると機を抜きにしたら法の尊さが何処にあるか、 し出されてこそ何にも知らない不実の機が知らされ
るのではないか、 法を浴びせる程聞かされながら 疑いが邪魔になつてゐる事がよく判るのではないか、それが晴れなけれ
ば今度の往生は不定と言う事もよく判るだろう、 機を見るなど言われても見ずにはいられなくなるのだ、 ここ迄進めばを選
ばずにはいられないのだ、何を聞いても理屈は判るが心が承知しない事もはつきり知れるのだ、攻め立つれば攻むる 逃げ歩
く心がよく判るのだ。 今迄聞いた事が総て役に立たない事が 明かに知らされるのだ、役に立たないと知りつつも何とか成ら
ないかとあせつてゐるのだ、其の下に善に向いては進まず、 悪に向いては止まらず自分ながら自由にならない悪性のいる事に
気が付くのだ、この機はきかないと言われても納得出来ず、 其の儘と教えられても承知ならず、 進むには進まねず、やめるに
はやめられず、聞いたのも覚えたのも知つたのも学んだのも悉く理屈であつて久遠劫からの自力の執情は除かれてはいないで
はないか。 明かなお慈悲を明かに聞いてはいないではないかと照し出された時、 腹の底が何と答えるか、心の中は火の車が
廻っているのだぞ 貪瞋邪偽の渦が巻いているのだぞ、都合のよい話を聞かされた処で、 機を見るなど言われたとて、法を見
ておりや何時とはなしに夜が明けると言われた処で、 満足する迄進まずにはいられるものか、疑うなどわれたつて疑わずにい
られるものか、 之迄切込む人が千人の中で一人位しかないのだ、この関所を進むのが難中の難なのだ、何も彼も役に立た

なくなつた時、八千遍の御苦勞を掛けながら十劫已来立ち続けさしながら、又三惡道へ歸らなければならぬと切詰めた時、にさえすれば往生なんて呑氣な事が言つていられるものか、今死んだらどうなるか、と臨終が初めて寄つて来て聞き切らない儘で死んだら必墮無間ではないか、私一人が逆謗の屍であり、三千世界の惡を一人で荷うているのであると驚かされた時、往生の望みは絶えてしまい、総ての竭きた時、地獄は一定住家ぞかし、とすつとり墮ちた時と唯ぞ！の一言、声なき声が麻痺し切つた心を貫き、撰取して捨てずと信樂開發、心得開明の境地に立たされた時、あつともすつともえないから不可稱不可説不可思議の信樂とも仰せられてあるではないか。必墮無間が無条件で生かされた端的が信一念であり、心相を言えば廣大難思の慶心、大經には信心歡喜、歡喜と説いてあるが、大きいも大きい底も知れないが広さも知れない、十方法界を一呑みにし、仏智は満入し、功德大宝海は我が有となつたのも、逆謗の屍が無上覺を極める約束が成就したのも、心一つは即得往生し諸仏如来と肩を並べているのだから、慶ばずにいられるものか、踊らずにいられるものか。真に罪惡の恐ろしさに戦いた人でなければ開發まで進まない、本当に疑網の邪魔に泣いた者でなければ広大な信念は得られない。

そんな大きな慶びが凡夫に有られるものかと言つている人は未だ有られないのだ。聖人様が有られた、法龍が有られた、求道者が有られない事が有るものか、全力を注いで掛れば成就しない事はない。大決定を得ないのは求道心が薄いからだ、熱が無いからだ、大事が掛らないからだ。